



学校教育目標

「ひと」とともに生きる生徒の育成



植竹の息吹き

令和八年
長月
第5号

「自律」「敬愛」「進取」の気概溢れる我らが学び舎
チーム植竹の創造

さいたま市立植竹中学校
さいたま市北区土呂町352
〒331-0804
TEL 048-663-2115
FAX 048-665-6377



一言(ひとこと)

校長 玉崎 芳行

「あんた、なに、このゴム手袋」

中学1年の初夏、美術の授業、課題は“デッサン”だった。自分の左掌を、自分なりに一生懸命書きこんだ。自分なりの納得感を心に秘め、美術の先生に作品を差し出した。返ってきた言葉が、その一言だった。その先生の美術の時間は、それ以来、あまり記憶にない。ただ、そのひとことの棘（トゲ）だけは、五十年近く経つ今も、私の心に刺さったままだ。

「せんせい… ありがと…」

教職人生を通し、一年間だけ小学校に勤務した。大学を卒業した春、小学校4年4組担任として、若さと勢いだけで駆け抜けたような教員一年目。ある理科のテストで、『氷がとけたら、なにになりますか。』という問いの解答欄に、『春になります。』と記されていた。私は、思わず、大きな花マルを付けてしまった。答案を返却する際に、教科的な正解の説明と花マルの意味を彼に伝えた。彼が、はにかみながら、嬉しそうな表情で返した言葉が、その一言だった。

「たまちゃん、3組、いいクラスに育ってんなあ。あんなに仲間を応援するクラス、なかなかねーぞ。」

中学校教員として初めて担任した1年3組の体育祭終了後、今も敬愛する先輩から、ふと声を掛けられた。自分でも抑えられないくらい涙がこぼれた。生徒が褒められたことが、嬉しくて嬉しくて嬉しくて、たまらなかった。

乱暴な言葉を振り回す人は、自分では気づかないまま、人の心に痛みを与える。

言葉の優しさを知る人は、自分のことばに温もりが生まれる。

言葉の重みを知る人は、自分のことばに責任をもつ。

今の仲間と、今の教室で、ことばを交わすことができる時間の終わりが、近づいてきている。しかし、たとえ別れが来ようとも、交わしたことばに込められた想いは、あなたとあの人の心に残る。

新しい学期を迎える。終業式、始業式でも皆に伝えた。「ここは、人を傷つけたり泣かしたり貶めたりする所ではない。いじめは、絶対に許されない。自分の言葉と行いを、自分の心の鏡に映そう。」と。

良識と良心から昇華された一言を、紡ぐことができる人で在りたい。